



デュルケーム／デュルケーム学派研究会

Japanese Association for Durkheimian Studies

ニューズレター

第11・12合併号〔2011年12月25日発行〕

会長 大野道邦 <mitikuni@mua.biglobe.ne.jp>

郵便振替口座番号：00980-4-20999

編集事務局 奈良女子大学文学部

(口座名称) デュルケーム研究会

Tel 0742-20-3264, 3259

編集

中島道男

江頭大蔵

小川伸彦

<mnakajima@cc.nara-wu.ac.jp><egasira@law.hiroshima-u.ac.jp><ogawax@dream.com>

デュルケーム／デュルケーム学派研究会の趣旨

世紀転換期のグローバルなレベルにおける社会的、文化的な変化の中にあつて、最近、国際的にも国内的にも、デュルケームやデュルケーム学派の業績の再評価の機運が高まってきている。わが国においても、若い世代を中心としてデュルケーム／デュルケーム学派に関心を抱く研究者が増えつつある。

このような状況を考慮に入れつつ、前世紀転換期の古典であるデュルケーム社会学、および、その発展型としてのデュルケーム学派について調査・研究することによって、現世紀転換期の社会・文化・人間の構造や動態を分析・説明・解釈するための基礎的・原理的なパースペクティブを明らかにしたい。このために、相互啓発的な研究会を定期的に開催する。

第20回研究例会（2010年4月17日、関西学院大学 東京丸の内キャンパス）

報告1 清水強志 氏（専修大学）

逸脱と自殺——『自殺論』再考と秋田県の自殺

コメンテーター：江頭大蔵 氏（広島大学）

報告2 荻野昌弘 氏（関西学院大学）

ユートピア、野蛮／原初／未開、他界——三つの異空間表現と社会学

コメンテーター：伊達聖伸 氏（神戸大学）

第21回研究例会（2010年10月23日、京都学園大学 京町家キャンパス）

報告1 安達智史 氏（日本学術振興会／東北大学）

新労働党のデュルケミアン・ヘゲモニー
——「テロ防止」政策の批判的検討

コメンテーター：三上剛史 氏（神戸大学）

報告2 北垣 徹 氏（西南学院大学）

プラグマティズム・インパクト——生と行動の社会学

コメンテーター：太田健児 氏（尚絅学院大学）

【第20回研究例会報告要旨】

〔報告1〕 清水強志（専修大学）

逸脱と自殺——『自殺論』再考と秋田県の自殺

1998年に3万人を超えた日本の自殺数は10年以上に渡り、約3万人という数値を維持している。多くの先行研究あるいは行政などによる発表では、その原因として「健康問題」、「経済・生活問題」などが上位を占めていることに言及した上で、「うつ病」との関わりを重視している。また、自殺率の都道府県別順位などから東北地方と自殺、つまり、気候と自殺との関連を人々に想起させる傾向がある。それゆえに、宮崎県の自殺率が高いこと、また、平成20年の自殺者のうち「うつ病」がきっかけとなった（と断定できた）人が20.1%であったと警察庁が発表している事実は非常に重要である。

私自身、自殺研究を進めるに当たり、多くのとまどいを感じてきた。たとえば、近年、社会学的な視点を取り入れた自殺研究が多数みられるようになった半面で、『自殺論』（1897年）においてデュルケームが社会ごとに存在する自殺率に注目し、自殺の要因を精神異常、精神錯乱、遺伝などの個人的条件に還元しようとする諸説を否定し、自殺は個々人の孤立的な個人的行為ではなく、むしろ個人がおかれている社会的環境との関連で引き起こされていると主張したことをほとんど重視していないからである。

そこで、本報告は「なぜ社会が自殺という行為の回数を決定するのか」ということを再検討した中間報告的なものとなっている。研究会では、実際に私が入手したいくつかの自殺率のデータ（全国、秋田県など）をもとに、多くの諸先生方からご意見を頂いた。なお、紙面の都合から大幅に内容を割愛してまとめることにする。

一定になる（あるいは近代社会においては増加する）自殺率の説明には、『自殺論』における「統合」と「規制」という2つの機能についての再検討が必要と考えられる。そこで、2つの機能と道德性の2つの要素の関連を探った。つまり、規律の精神にあらわされる行為様式＝規則への服従と、集団への愛着にあらわされる「集団への帰属意識（われわれ意識）」の存在を『自殺論』の議論に絡ませたのである。道德の科学としての社会学を目指すデュルケームは、道德の諸要素をもとに自殺（現象）にアプローチしていたといえる。

彼の思考背景には、（彼の意味するところの）道德性を備えた人物は自殺をしないというものがあつたと思われる。付言すれば、そこで重視されたのは道德の内容ではなく、社会と個人の関係のなかで示された「規律の精神」および「集団への愛着」を持つことのできなかつた人物が「自殺の傾向」を持ちやすいということであつた。

また、彼は『道德教育論』において、「すべて規律は二重の目的を有していた。すなわち、規律は、まず、個人の行動に一定の規律性を実現することを目指し、ついでさらに個人の行動に、その範囲を限定する特定の目的を与える」（1、81頁）と述べている。規制内容に「自殺行為」は含まれていない。適度のバランスのとれた規律の精神を有した人を「正常」とした上で、過度に規律を強めてしまった宿命の自殺と拘束を受け入れることができず、社会のなかにいながら苦悩する状態をアノミー的自殺と位置付けている。

他方、『自殺論』において「統合」についての明確な定義はされていない。そこで、「集団への愛着」で説明が可能かどうかを検討した。「人間が自ら好んで社会に帰属することが必要である。（中略）人間が自分以外のものになろうとして、自己の本性をいわば放棄することなしには、そのような愛着はなしえない」（1、99頁）と述べる彼は「集団への愛着」について語る中で、自殺についても言及している。「利己的な生き方をすればするほど、ますます自殺の危険にさらされる」（1、103頁）。これは自己本位的自殺の説明に合致している。

さらに『道德教育論』における以下の文章に注目した。すなわち、われわれは道德性の2つの基本的要素を区別して規定しようとしたために、互いに全く異なる別個のもののように見えた。「だが、実際には、これら2つの要素の間には、密接な関連があるのであつ

て、これらの要素は、同一の实在の2つの側面に他ならない(1 119-120 頁)というものである。デュルケーム自身、自殺タイプの複合形態について述べているが、現実の自殺は4つのすべてのタイプの混交したものであると考えるべきであるのかもしれない。また、このように眺められた自殺の分類によって、改めて『自殺論』における精査が必要に思われる。

報告の学説研究部分では、『自殺論』の議論を『道德教育論』によって補完することで、自殺率が「集合精神のある一定の状態」を示している(『規準』61 頁)と述べるデュルケームにおいて、3つの道徳的事実のうちの2つに注目していたことを明らかにした。

デュルケーム『道德教育論1』麻生誠他訳、明治図書出版、1964年。

デュルケーム『社会学的方法の規準』宮島喬訳、岩波書店、1978年。

〔報告2〕 荻野昌弘(関西学院大学)

ユートピア、野蛮／原初／未開、他界——三つの異空間表現と社会学

デュルケームの『宗教生活の原初形態』は、「現代人」を理解するために、もっとも「原始的」な「未開」の宗教を研究すると謳っている。デュルケームにとって、原始的な宗教は、他の宗教に比べて劣るものではない。あらゆる宗教は、根本的に同一性を有している。それでは、なぜ原始宗教を特権的な研究対象とする必要があるのか。

それは、デュルケームによれば、方法論上の理由からである。デュルケームは、「歴史」を遡り、最も原初的で、単純な形態について分析することで、宗教全般について理解することができるという。この歴史的方法は、19世紀に流布していた社会進化論とは異なる。それは、むしろ、「起源」を遡るという意味で、系譜学的方法とも呼びうるであろう。社会進化論と異なるのは、未開社会の宗教のなかにあらゆる宗教の本質が隠されており、根本的には、未開社会と現代社会(デュルケームの時代)には、大きな共通性があると考えているところである。そこには、未開社会を遅れた社会とする発想からは距離を置こうとする視点がある。

一方で、それは、同一性を基本的な概念とする近代科学の思惟形態を社会に関する研究に適応している。デュルケームにとって、異教は存在しない。キリスト教であれ、オーストラリアのアボリジニであれ、「同じ」人間の宗教である。ハイデッガーによれば、「同一性の原則」がなければ、科学の成立はありえない。なぜなら、科学の対象の「同一性」が保証されていなければ、科学は科学足りえないからである。デュルケームが、社会学の祖とされる理由は、ここにある。

しかし、こうした社会に関する学の成立に至るまで、社会に関する思考は、同一性の原則ではなく、差異の構築によって育まれてきた。決定的な差異、断絶を「他者」とのあいだに認識することで、社会を措定するという思考回路がとられ、それによって社会の存在が認識されるようになったのである。

こうした他者は、空間的に措定される。それは、大別して、三つのタイプに分けられる。それは、「ユートピア」「野蛮／原初／未開」「他界」という三つの異空間である。そこで、本報告では、社会学的思考の生成を促す認識論的転換とはどのようなものであったのかについて、「ユートピア」「野蛮／原初／未開」「他界」という三つの異空間の表現がいかに生成されたかを問いながら分析した。ちなみに、『宗教生活の原初形態』は、三つの異空間の表現のうち、「野蛮／原初／未開」「他界」のふたつをベースにしていると捉えることができよう。

【第21回研究例会報告要旨】

〔報告1〕 安達智史（日本学術振興会／東北大学）

新労働党のデュルケミアン・ヘゲモニー——「テロ防止」政策の批判的検討

本報告の目的は、イギリスの「テロ防止」政策を、デュルケミアン・ヘゲモニーという視点から分析することにより、新労働党による社会統合政策・哲学の意義と限界について論じることにある。

グローバル化の進展、とりわけ、1980年代から増大する移民・難民の波は、各国の文化的・宗教的・民族的景観（-scape）を大きく変化させている。その変化は、ホスト社会の旧来の慣習と大きな摩擦を生じさせ、さまざまな紛争を生み出している。スカーフ／ヴェール論争、人種関係に起因する都市暴動、過激派によるテロリズム（以下、テロ）といった、今日、多くの国で見られる事件が、アイデンティティの喪失や存在論的不安をもたらしている。このような状況を背景に、近年、フランスの社会学者エミール・デュルケムの社会理論が改めて注目されている。多様化のなかの統合という現代社会が直面する問題が、デュルケムが1世紀以上前に格闘した近代化をめぐる問いと、ある種の同型性が認められているためである。実際、イギリスの新労働党の政策は、デュルケム理論との関係で議論されることがある。本報告は、なかでも、新労働党のテロ防止政策に焦点を当て、そのデュルケム的な側面について論じる。

新労働党の政策のなかに、デュルケム的要素を見出したのがルース・レヴィタスである。彼女は、両者の下記のような類似性を指摘している。第1に、新労働党は、デュルケムと同様に、社会統合を道徳的な問題として定義し、そのため、社会的排除や分裂の理由を共通性の欠如としてとらえる傾向がある。第2に、統合の要である道徳の定義に対し、国家に重要な役割を与えている点である。それと同時に、第3に、道徳的な統合の源泉として、中間団体の役割を認め、その国家とのコミュニケーションを強調する点も共通している。だが、新労働党の包摂・統合政策と哲学は、その問題点をもデュルケムと共有している。たとえば、第4に、社会統合を道徳の問題として定義するため、経済的・社会的不平等や権力という要因を見逃してしまう点が挙げられる。第5に、デュルケムも新労働党も、個々の集団間や国家との間にある利害対立を軽視する傾向がある。では、このような新労働党のデュルケミアン・モーメントは、そのテロ対策にどのように反映されているのだろうか。

イギリスのテロ対策の一つの要が、「テロ防止（prevention）」政策である。この政策は、2005年のロンドンにおける「国産（home-grown）」テロリストによる爆破事件をきっかけとしており、若者ムスリムをイギリス社会やコミュニティへと包摂することにより、テロを予防することをその目的と定めている。その包摂のために強調されているのが、「ブリティッシュネス（Britishness）」という観念である。それは、国際主義、外向性、寛容、あるいはフェア・プレー、創造性など民主主義的な価値により定義され、イギリスに在住する者すべてが共有しなければならないと考えられている。このブリティッシュネスに体现される民主主義的な共通価値は、「地方による解決の支援、市民的能力とリーダーシップの構築、信仰組織とリーダーの強化」を通じて達成され、そのために、さまざまなコミュニティへの政策が打ち出された。

だが、国家により打ち出される共通価値や、国家とローカルなコミュニティとのある種のコミュニケーションを重視する新労働党のテロ防止政策は、レヴィタスがデュルケミアン・ヘゲモニーと呼ぶ問題性をもはらんでいる。社会統合を価値の共有へと還元することにより、制度的差別や階層格差といった問題が隠蔽されてしまうということである。また、ローカル・コミュニティを巻き込み、価値統合を推し進める新労働党の姿勢は、一種の危うさをはらんでいる。それは、〈善きムスリム／悪きムスリム〉という、単純化された二項図式に看取することができる。善きムスリムは、イギリスの（民主主義的）価値へのコミットメントにより定義され、その結果、民主主義を否定するテロに対する戦争に賛同

するはずだと想定される。逆にいえば、テロに対する戦争に参加しないムスリムは、イギリス人たりえず、そのような悪しきムスリムは排除されなければならないという考えに至るのである。このような共通価値の促進は、ローカルなコミュニティとのコミュニケーションと協力においてなされるが、それは逆にコミュニティの分断をもたらす。なぜなら、政府に協力する良きコミュニティと、そうでない悪しきコミュニティという区分が引かれ、コミュニティ間の相互不信をもたらすからである。

グローバル化にともない、文化的・民族的・宗教的多元化が進行するなかで、新労働党が、デュルケムが提示したように、国家とコミュニティとのコミュニケーションを通じた価値統合を主張するのは、ある意味で必然であった。だが、新労働党のテロ防止政策の分析において見たように、そのような価値が過度に強調されたり、それがあつた具体的な政治的態度への恭順を求めるものとなるとき、逆に統合を危うくするのである。その解決には、共通価値の強調ではなく、社会的・政治的行動を生み出す人々の「情念」を理解し、その原因となっている構造的な不平等に取り組むことである。

〔報告2〕 北垣 徹（西南学院大学）

プラグマティズム・インパクト——生と行動の社会学

プラグマティズムは、しばしば安直にそうみなされているような、たんなる功利主義や現実主義ではなく、機会主義や快楽主義でもない。それは哲学史上のたんなる一学派を越えた、新たな精神の態度である。それは19世紀後半に起こつた知的変動の結果として生じる。すなわち、「自然の鏡」が砕けて、観念は世界を透明なかたちで映し出すことを止め、主観と客観の位置関係は揺らぎ、自然主義的世界観が崩壊した結果、プラグマティズムは誕生するのだ。これによつてもたらされるインパクトは、哲学の狭い領域にとどまらず、科学や芸術のさまざまな分野にまで波及する。それはまさしく、同時期に進化論が、時間と空間の認識を変え、これまでになつた世界観をもたらすのと同様である。

黎明期の社会学も、この思想の影響と無関係ではない。デュルケムがこの思想を講義で取り上げ、詳しく論じていることはよく知られている。この講義で彼は、社会学とプラグマティズムを「同じ一つの時代から生まれた二つの傾向」であるとみなしている。またデュルケムは、以前の哲学によつては「事物の複雑さの意味」を見いだすことができず、それができるのはプラグマティズムであり、またそれを行うのが社会学の課題であるとも考えている。

どうしてプラグマティズムが「事物の複雑さの意味」を見いだすことができると考えられるのか。功利主義的に解釈するかぎり、プラグマティズムはむしろ「単純」な思想に見える。しかしながら実は、この思想は何よりも「複雑な現実」を念頭においており、それまでの伝統では対処しきれないような新たな現実を前提としている。いわばそれは、複雑性や多数性を縮減するという要請のゆえに生まれた思想である。複雑な現実が存在するがゆえに、一見したところ単純な思想が求められるのだ。

したがつて、複雑さと単純さを同時に抱えるプラグマティズムには、ある種の飛躍、断絶、逸脱、屈折、脱臼がつきまとうことになる。この思想によれば、ある事物の起源は、その事物がもつ意味の説明にはならない。起源に遡つても、そこには曖昧で混乱した事態しかない。事物の意味は、現実においてもたらされる効果によつてこそ説明しうる。起源がどうあれ、事物が今後引き起こすであろう実践上の効力こそが、その意味である。こうした発想は、原因から結果へという決定論の平面からは離脱しており、過去よりも未来に向けて開かれている。未来に向けても、「何のためにやるのか」を問うのではなく、つねに「どうやればいいのか」を問いかけ、決定論だけでなく目的論からも離脱している。由来も目的も分からず、世界にいきなり投げ込まれた状態で、実践や経験だけを手がかりとして思考するのだ。いわばそれは投企の思想であり、実存主義の先駆形態ともいえる。

こうした発想は、プラグマティズムだけでなく、社会学のなかにもある。つまり事物の

意味を、利益や有用性のみに還元されることのない効果において、あるいは生活や行動において、あるいは状況や文脈において見いだすというのは、すぐれて社会学的な視座である。それは、個人の行為にたいして相互行為が先立つ、あるいは、行為の文脈が先立つということである。文脈のなかの相互行為の一つとして、個人の行為は初めて意味や効力をもつのだ。またこうした視座からすれば、事物の意味は事物そのものの内部に存在するのではなく、外部との接触によってこそ生じるものとみなされる。したがって意味には、つねに偶有性がつきまとい、ずれやねじれが絡んでくることになる。内部と外部の境界上で、たえず意味がずれたりねじれていくなかでの実践や経験こそが、すぐれて社会学的な対象となるのだ。

デュルケーム以降、社会学が宗教に眼を向けるのも、まさにこうした視座からである。ある宗教の教えは、その内容の側から捉えても意味がない。内容、すなわち教義に含まれる世界観や倫理観から、宗教の意味が生まれるのではない。そうではなく、ある宗教の教えは、その効果の側から捉えなければならない。つまり教えは、例えば信者に伝わったときに引き起こされる力において、はじめて意味をもつ。その宗教が、どのような世界を描いているかは問題ではない。問題なのは、そうした世界観が信者に伝わったときに、信者がいかに感じ行動するかである。極端に言えば、教えの内容はなくても構わず、教えを読んだり聴いたりして、意味が分からなくても構わないのである。大事なのは、教えを生きることであり、例えば念仏として唱えたり、教えを書き写したりすることである。あるいは教えをある者が語り、他の者はそれを聞くということである。要は実践や経験としての、あるいは儀礼としての側面が重要なのだ。そうした多数による実践や経験が、総体として大きな社会的行動を形成する場合に、その宗教は重大な意味をもったということになる。プラグマティズムとともに、社会学はこのような視座から宗教を捉え始めるだろう。

第22回研究例会（2011年4月16日、和歌山大学まちかどサテライト）

報告1 中倉智徳氏（立命館大学）
発明し模倣する個人からなるアソシアション
——ガブリエル・タルドにおける社会学と経済心理学

コメンテーター：池田祥英氏（早稲田大学）

報告2 溝口大助氏（東京外国語大学）
初期モースの宗教論について

コメンテーター：藤吉圭二氏（高野山大学）

第23回研究例会（2010年10月23日、京都学園大学 京町家キャンパス）

報告1 多田光宏氏（早稲田大学）
一種独特の非物質性をめぐって
——エミール・デュルケームの社会概念の展開のために

コメンテーター：油井清光氏（神戸大学）

報告2 菊谷和宏氏（和歌山大学）
社会科学の科学性と我々の生——デュルケーム社会学と不死性について

コメンテーター：梅沢 精氏（新潟産業大学）

【第2回研究例会報告要旨】

〔報告1〕 中倉智徳（立命館大学）

発明し模倣する個人からなるアソシアシオン

——ガブリエル・タルドにおける社会学と経済心理学

本報告では、報告者の博士論文「ガブリエル・タルドにおける社会学理論と経済心理学に関する研究」(『ガブリエル・タルド——贈与とアソシアシオンの体制へ』洛北出版、2011年として刊行)をもとにし、とくにその社会学について中心に報告した。

タルドについては、すでに複数の再評価の潮流がある。先ず、ドゥルーズを経由して、差異の哲学者としての評価がある程度認められつつあるが、社会学説については、「あらゆる事物は社会であり、あらゆる現象は社会的事実である」(Tarde [1898] 1999=2008: 163)といった存在論的な側面が強調されてきた。このような議論は、ドゥルーズへとつながるだけではなく、ラトゥールら人類学者によって、人だけではなくモノもアクターとしてみなし、そのアクター・ネットワークとして状況や科学理論、発明の形成過程の分析を行なう議論の先駆として扱われる理由の主な一つともなっており、非常に重要である。こうして、哲学者タルドの再発見は、「タルド・ルネッサンス」にとって大きな成果をもたらしてきた。

しかし、本報告では、存在論的な領域にあえて踏み込まずに、社会学形成初期の社会学理論として評価することを試みた。もちろん社会学史のなかでのタルド＝デュルケム論争をめぐる、あるいはタルドの模倣説をめぐる研究、公衆論はすでに蓄積されている。ただ、さらにタルドの社会学の形成という点からみたとき、タルドの論敵は、ベンサム、ミルといった功利主義者や、古典派経済学者、社会主義者たちといった、タルド以前の社会思想史家であった。つまり、社会思想から分化しつつある社会学の一つとして、タルドは——デュルケムについても同様のことは指摘されてきた——位置づけられる必要がある。そうすることで、タルドの模倣の法則を含めた社会学理論は、政治学、法律学、道徳学、経済学を含む、一般社会学の基本的な方法論を構成していることが理解できる。

すでに知られているとおり、タルドの社会学理論は、発明と模倣によるコミュニケーションを対象とするものであるが、発明され、模倣されるものは、信念と欲望である。また、タルドは人の行為を、欲望を大前提とし、信念を小前提とし、そこから行為が帰結するような「実践的三段論法」によって記述しうるとし、さらに信念と欲望を量としてみなすという、合理的選択理論の先駆といわれるフランク・ラムジーの議論と非常に近い議論をさらに数十年早く提示していた。さらにいえば、行為を決定する二項である信念と欲望が、いずれも他者とのコミュニケーションによって変動しうるとみなしている点において独自である。このような社会学理論を前提において、タルドは一般社会学というかたちで、社会諸科学を再構築しようとしていたのである。

タルドの一般社会学は、社会論理学と社会目的論というおおきく二つの分野から構成されており、社会目的論の下位分野として上述の政治学、法律学、道徳学、経済学の四つの領域が含まれている。そして、コミュニケーションし、相互交流によって欲望や判断を変更する個人を前提とすることで、例えば、快楽計算にもとづく功利主義に代わる、信念と欲望にもとづいた道徳計算について、ベンサムを批判しながら検討したり、経済学においてホモ・エコノミクスを批判し、価値、労働、資本、価格といった、経済学の基本概念を鋳直したりするなどしていたのである。そして、一般社会学総体として目指すべき理念として、信念と欲望を調和させる無数のアソシアシオンの体制の確立を主張していたということを示すことを明らかにした。

これらのタルドの試みは、現在の通常科学としての社会学からみれば、余剰としてみなされるかもしれない。しかし、けしてタルド社会学は当時においては周辺、余剰としてみなされていなかったことから、19世紀末の社会学が、他の諸社会科学、とりわけ経済学といかなる対抗関係あるいは協調関係をもっていたのかということを示す一例である。

う。と同時に、今こそ分化過程において取りこぼされた余剰部分に注目し、社会学が他の社会諸科学とどのような対抗関係あるいは協調関係のなかで、現状分析を可能にするツールとして有効でありうるのかを検討する必要があるのではないか。コミュニケーションや社会ネットワークといった社会的対象から、いかにして経済的なものは語りうるのか。今後は上記のような問いを、経済思想史の成果や、80年代後半以降の現在の経済社会学の議論なども参照しながらタルドとともに検討していきたい。

Tarde, Gabriel, [1898] 1999, *Les Lois sociales*, Paris: Institut Synthélabo. (= 2008, 村澤真保呂・信友建志 訳『社会法則／モナド論と社会学』河出書房新社.)

〔報告2〕 溝口大助（東京外国語大学）

初期モースの宗教論について

1894年に大学教授資格試験準備のためパリを訪れたときに、インド文献学の泰斗シルヴァン・レヴィにはじめて邂逅したモースは、翌年教授資格（哲学）を取得後、高等研究実習院第五部門に所属し、宗教学者たちのなかで学的訓練を受けた。高等研究実習院第五部門では、シルヴァン・レヴィを指導教官にもち、ユダヤ学のイスラエル・レヴィ、宗教学史研究を確固たる地位まで高めたレヴィーユ父子、ヴェルヌ、未開民族の宗教を対象としていたマリリエなどに学んでいった。

本報告の目的は、上記の点を踏まえ、初期マルセル・モースの宗教論を対象とし、彼がどのように宗教社会学の主題と分析視角を世紀転換期の学的条件のうちで鍛え上げていったのか探求することにある。より具体的には、最初に、モースがヴェーダ文献に依拠することにより、1899年に書き上げた『供犠論』に着目し、次に、彼が二四歳になって研究者として初めて発表した1896年と1897年の書評論文の重要性を明らかにする。最後に、1899年のこの『供犠論』を書き上げたことが一つの大きな転換点となって、モース宗教研究のみならずデュルケーム学派の宗教研究が大きく進展する点を明らかにする。その内実が明確になるにしたがって、モースが同時代に社会主義運動家として20世紀転換期の「モラル」をどのように追求していったのかもあわせて指摘する。

モースは、『供犠論』の結論部で、「多くの社会的な信仰と実践とが、本来的に宗教的なものでなくとも、供犠と関連して存在しており、「契約、贖い、刑罰、贈与、（自己）犠牲、依然として共同（体）のモラルの基盤となる霊魂と不滅をめぐる観念」と深いかわりをもっているとした点で、デュルケーム社会学にとって『供犠論』は重要な書物であった。なぜなら、共同体におけるモラルの基盤と聖性の生成メカニズムとを本書で連絡したからである。

近年高まりつつあるモース再評価が、思想史の位相では、「功利的理性批判」の議論を展開するアラン・カイエに代表されるように、『贈与論』に集中している点（デリダ、ルフォール、ゴドブーなど）、またレヴィ＝ストロース以後のフランス現代人類学のあり方が模索されるなかで、ゴドリエに代表されるようにモース思想の重要性に焦点が定められている点は周知のこととなりつつある。だが、だからこそ、『贈与論』や『呪術論』以前のモース、インド文献学の訓練を受けていた時代のモースを看過しないようにしたい。モダニティ自体の再検討が行われている現今、それが置き去りにしたもの、すなわち供犠、復讐、呪いなどの近代の残滓を今一度熟慮するときなのではないだろうか。初期モースの宗教論に立ち戻ることは、近年の四度目となるモース・ルネッサンス¹の批判的乗り越えを可能にするだろう。なぜなら、初期のモースをとりあげることは、「暴力」と「想像的なもの」あるいは「モラル」との連関に関する課題、もしくは初期モースが若き社会主義運動家のころから一貫して考えてきた「社会主義＝新しい道徳（モラル・ヌーヴェル）新しい道徳」の課題を再検討することにも当然つながるからである。

1 モース研究ルネッサンスは、四期に分かれるともいえる。一般的には三期の区分は次のようである。

第一期は、『社会学と人類学』(*Sociologie et anthropologie*, PUF, [1950])が刊行された一九五〇年である。その前後の時代は、レヴィ=ストロースが序文を寄せ、そこで「構造主義の父モース」と規定されることにより抜きがたいモースへの堅固なイメージが提起された時期である。第二期は、カラディが編集したモースの三巻にわたる『著作集』が刊行された時期である(Mauss, M., *Œuvre :1. Les fonctions sociales du sacré*, Éditions de Minuit, 1968. *Œuvre :2. Représentations collectives et diversité des civilisations*, Éditions de Minuit, 1968. *Œuvre :3. Cohésion sociale et divisions de la sociologie*, Éditions de Minuit, 1969.)。この時期は、全てではないが、多くの書評や未刊行論文のほとんどが三巻の『著作集』に掲載され、モース研究が飛躍的に展開した時期である。第三期は、マルセル・フルニエが不明瞭だった社会主義者モース像を明確にした時期である。そこでは、マルセル・フルニエが詳細に記述したモース伝記的書物『マルセル・モース』(Fournier, Marcel., *Marcel Mauss*, Fayard, 1994. 以下 *MM* と略記) および同著者が蒐集・編集したモースの『政治論集』(Mauss, M., *Écrits politiques*, Fayard, 1997) が同時期に刊行された。最後に第四期である。第四期では、マルセル・モースの理路を基軸にした研究運動体 M.A.U.S.S.(Mouvement anti-utilitariste dans les sciences sociales)が積極的に研究書もしくは論文を提示した一九九〇年代から二十一世紀転換期の現在である。

【第23回研究例会報告要旨】

〔報告1〕 多田光宏 (早稲田大学)

一種独特の非物質性をめぐって —— エミール・デュルケムの社会概念の展開のために

本報告の目的は、エミール・デュルケムのいう「一種独特の实在」としての社会の存在性格はいかなるものかという問題を開き、またそれを検討するための道筋をつけることにある。彼が「一種独特の非物質性」(Durkheim [1895] 1956: 143 = 1978: 267 強調体原文)と呼んだ社会的なものの存在性格は、不問のままにされているが、現代社会の理論であるには社会概念の彫琢は不可避だからである。

デュルケムの社会概念を仔細に検討した数少ない例として、タルコット・パーソンズの『社会的行為の構造』を挙げることができる。パーソンズは、デュルケムが実証主義的基盤に立ちながらも個人主義者ではなく、むしろ観念主義と親和的な集合主義者であり、そのため観念主義と実証主義とのあいだを揺れ動いたと指摘した。とくに晩年のデュルケムは、社会を経験的实在ではなく、ホワイトヘッドの言う「永遠の客体」の世界の一部と見なした。パーソンズ自身は、経験科学たるべき社会学の対象である社会の定義をそこまで理念主義化することには反対し、デュルケムもまた陥っていた「社会名目主義—社会实在主義のジレンマ」(Parsons [1937] 1968: 74 = 1976 [1]: 120)を超克すべく、社会的实在は分析的抽象のひとつとして扱うしかないとしたのだった(Parsons [1937] 1968: 357 = 1989 [3]: 81)。

だがパーソンズによる以上の解釈は、デュルケムの社会实在主義が、実体主義的というより関係的(結合的)实在主義であることを考慮していない。社会は形而上学的な実体ではなく、諸個人間の相互関係の「システム」として生じるというのが、デュルケムの理解だった。彼のこうした社会实在主義は、本人自身がくりかえし示唆するように、じつは当時の新しい心理学的潮流、とりわけウィリアム・ジェイムズの「意識(思考)の流れ」を、社会的領域に類比的に応用したものであった。社会が實在的であるのは、意識が解剖学的・生理学的水準に還元不可能だが、だからといって魂のような実体でもないのと同じだということである。

還元主義という意味での実証主義ではなく、だからといって有機体主義や生氣主義のような形而上学的な全体説でもないデュルケムの関係的实在主義は、「創発主義」として特徴づけうるものである。フランスの実証主義的伝統を引き継ぐとされるデュルケムだが、そもそも彼は「実証主義への反逆」と特徴づけられる「1890年代の世代」(Hughes 1958 = 1970)に属している。彼は、自然科学的な思考法を人間行動にも適用する要素還元主

義を拒否し、だが形而上学的な全体説も斥けて、創発主義的な観点から社会という対象領域の独自性を確保し、社会学を独立科学たらしめようとしたのだった。

以上を踏まえて、もし意識の創発特性を社会に適用するのが妥当だとするなら、社会の存在性格もまた「流れ」として捉えられるべきだろう。実際、同世代の「反逆者」たち、たとえばベルクソンやフッサールといった哲学者たちによる、自己構成的な時間意識への徹底した洞察はもとより、ジンメルやヴェーバーといった社会学者たちもまた、流動的な時間性への着目から出発していた。ジンメルの「社会化（＝社会になっていくこと）」という生成的な社会観や、価値多神教的な流転を肯定的に捉えたヴェーバーの社会科学論に、それが反映されている。

したがって、社会の一種独特の非物質性とは、意識に比肩される「時間性」の観点から捉えられなければならない。時間を自己構成していく創発的な特性に、マイクロかマクロかといった空間的な大小は関係ない。事実、デュルケムが『自殺論』においてアノミーの状態の恒常化として示唆したように、近代社会はその流動性を常態化させている。それゆえ、この時代に即した社会の再概念化には時間性への着目が不可欠であり、それによって社会学は、近代社会という固有の対象を現実に沿った仕方であらためて確保し、ひとつの近代科学としての独立を再確認できるはずである。

Durkheim, Émile, [1895] 1956, *Les règles de la méthode sociologique*, 13^e éd., Paris: Presses Universitaires de France. (= 1978, 宮島喬訳『社会学的方法の規準』岩波書店.)

Parsons, Talcott, [1937] 1968, *The Structure of Social Action: A Study in Social Theory with Special Reference to a Group of Recent European Writers*, vol.I-II, New York: Free Press. (= 1976/86/89/74/89, 稲上毅・厚東洋輔・溝部明男訳『社会的行為の構造 [1-5]』木鐸社.)

Hughes, Stuart H., 1958, *Consciousness and Society: The Reconstruction of European Social Thought 1890-1930*, New York: Alfred A. Knopf, Inc. (= 1970, 生松敬三・荒川幾男訳『意識と社会——ヨーロッパ社会思想 1890-1930』みすず書房.)

〔報告2〕 菊谷和宏（和歌山大学）

社会科学の科学性と我々の生——デュルケム社会学と不死性について

多分に実験的で萌芽的な本報告では、『社会学的方法の規準』を主たる対象として、不死性の知的希求としての科学に関し以下の三点が順に論じられ、のち総括された。

1. 社会的事実の客観性：「死なない」

社会現象・社会制度の「固有の存在性」「客観的な(objective)実在性」を主張し、社会的事実を意識の外部に存する「物」とするデュルケムの立場は、他方で物としての社会的事実の可感性を主張する彼自身の実証主義・経験科学の立場と矛盾する。なぜなら、意識という認識主体・経験主体の存在以前に社会現象があったなどとは、経験に即すならば言いえないからだ。それはどこまで行っても仮定でしかなく、経験科学の経験性を保証するものではない。

それを対象化する(objectiver)意識があつてこそ存在や性質を論じられるはずの「物」が、個々人の意識から独立して有ると考えることは、その意識の消滅後もその対象が存在し続けると信じることと同義である。しかし、それは実証科学のそもそもの前提に反している。それはデュルケムが拒否した形而上学である。にもかかわらずそのように信じるということは、そもそもの前提を否定して、個々人の意識は消滅しない、つまり死なない・死にえないと考えていることになる。

このような意味での社会的事実を無理に定立すること、そしてこれを根拠に客観的な事実・原理・法則を発見しようとすることは、結局のところ「私ないし我々の身体は滅んで

も、私ないし我々が社会から受け継いだとされるなにものかは、その後も依然残る」ということを論理的に納得しようとしているのではないのか。世界の超越的な解釈枠組としての神学や形而上学を否定するデュルケーム社会学でさえ、実は、それらと同じ「死の否定」によって駆動されているのではないのか？

2. 正常と異常：「死にたくない」I

デュルケームは、社会現象における「正常と異常」について、前者を有用性や適応と、後者を苦痛や不適応と関連付ける従来の解釈を退け、「一般と例外」としてこれを捉え直す。それは、質や価値や意味を含まない測定可能な「量」による「価値中立」で「客観的」な定義に見える、が実はそうではない。そこで一般性は正常性の目印に過ぎず、社会現象の正常性はむしろその現象の優越性に、つまり他のあり方よりも社会的生が存続するという、つまりより「生き延びやすい」という性質に求められている。

デュルケームはこの論理をもって犯罪を検討する。そして集合的生が環境の変化にもかかわらず維持される＝生き延びるために犯罪者は必要な存在であるとし、ソクラテスの例を持ち出す。ソクラテスは自ら毒を飲み刑死することでアテナイを生かした。ソクラテス（の身体）は死ぬことでアテナイの集合的生を存続させたのだ（そしてそのことによってソクラテス自身も今日までさえ続くある種の生を得た。つまり人類の集合的生の一部、人類の遺産となった）。だからこそソクラテスの「犯罪」は正常で必要なものとされる。その行為の一般性ゆえにでは決してなく、その生への貢献ゆえに。

3. 機能主義：「死にたくない」II

社会的事実の説明に関してデュルケームは、目的論を批判し機能主義を主張する。ここで機能主義とは、組織（有機体）の正常な機能を前提としこれを解明する立場である。したがってそれは「機能を維持し、もって生存を維持する」という目的を持っている。つまり、意図や目的から離れることを主張する機能主義は、集合的生を維持する＝生存するという目的に基礎付けられ、この目的を暗黙の大前提として隠し持つ「科学的」認識である。

まとめ

「近代社会を生み出した世俗化過程によって、信仰や死は、宗教という公的領域から個人の内面という私的領域に追いやられた」と時に言われる。しかし、実は近代の公的領域においても死を取り扱う（乗り越える）努力が、「科学」という方法で続けられているのではないのか？ 結局のところ、宗教であれ科学であれおよそ世界を解釈し説明する営みとは、死を否定し、これを乗り越えようという努力なのではないのか？ 宗教の場合は信仰によって、科学の場合は知性によって。自然科学の場合は物理的存在性によって。そして社会科学の場合は社会の物理的存在性に加えて社会的生にもよって。

そもそも本当に科学は「事実をあきらかにする」ものなのか？ 現象を「事実」として「客観的に」把握する営みは経験に即した行為ではありえず、それこそまさしく知的な方法での死の超克なのではないのか？ だとすればこの「科学的事実」は、経験の中の事実ではない。にもかかわらず社会学・社会科学は経験科学でありうるというのならば、その科学性は別様に担保される必要がある。さもなければ、デュルケーム社会学において標榜されたような完全な世俗性、まったき経験性をあきらめて、宗教や技術の軍門に、政治や営利の軍門に、降らざるをえないのではないだろうか？

【 会 員 業 績 】

- 安達智史, 2010, 「ブリティッシュネスの解体と再想像——ポスト権限委譲におけるナショナルおよびサブナショナル・アイデンティティ」『社会学年報』(東北社会学会) 39: 51-62.
- , 2011a, "Reflexive Modernity and Young Muslims: Identity Management in a Diverse Area in the UK," in K. Kimura ed., *Minorities and Diversity*, Australia: Trans Pacific Press, 83-99.
- , 2011b, 「新労働党の『テロリズム防止』政策の批判的検討—ポスト・テロ時代の社会統合について」『フォーラム現代社会学』10: 135-47.
- , 2011c, 「グローバル化時代における社会統合政策について—フランスとイギリスのスクーフ論争の比較を通して」『社会学研究』89: 85-109.
- , 2011d, 「フランスとイギリスにおける社会統合の比較—伝統・政治・実践に着目して」『コロキウム』6: 74-92.
- , 2011e, "Social Integration in Post-Multiculturalism: An Analysis of Social Integration Policy in Post-war Britain," *International Journal of Japanese Sociology*, 20(1): 107-20.
- 江頭大蔵, 2010a, 「過労自殺とデュルケムの自殺類型論について」『社会分析』(日本社会分析学会) 37: 27-45.
- , 2010b, 「先行研究に学ぶ」谷富夫・山本努編『よくわかる質的社会調査 プロセス編』ミネルヴァ書房, 68-81.
- , 2010c, 「自殺論——デュルケム」「アノミー——マートン」「結合定量の法則——高田保馬」日本社会学会社会学事典刊行委員会編『社会学事典』丸善, 26-27, 70-71, 92-93.
- 大野道邦, 2010a, 「集合的記憶」日本社会学会社会学事典刊行委員会編『社会学事典』丸善, 642-643.
- /コルネーエヴァ・スヴェトラーナ, 2010b, 「ソローキン再訪——文化社会学の巨人」『京都橘大学 研究紀要』36: 133-152.
- , 2011a, 『可能性としての文化社会学——カルチュラル・ターンとディシプリン』世界思想社.
- , 2011b, 「ソローキンとロシア、そしてコミ共和国」『京都橘大学文化政策研究センター ニューズレター』39: 4-5. (エッセイ「Interface 文化政策との出会い」欄)
- 岡崎宏樹, 2010a, 「デュルケムとバタイユにおける力の社会学」『日仏社会学会年報』19: 63-77.
- , 2010b, 「純粹贈与について」『Becoming』(BC 出版) 26: 63-91.
- , 2010c, 「聖俗遊理論——カイヨワ」日本社会学会社会学事典刊行委員会編『社会学事典』丸善, 114-115.
- , 2010d, 「中等教育の中の社会学」『社会学評論』61(3): 257-275.
- , 2011a, 「美から社会を学ぶ/社会から美を学ぶ——美と社会の総合学習」『人間文化研究』27: 45-60.
- , 2011b, 「共同性の三次元——集団性・生命性・他者性」『社会学史研究』33:2 1-39.
- 菊谷和宏, 2010a, 「パリ・ディドロ大学(パリ第七大学) & ユーロメッド・マネジメントとの交流報告 2009 ~客員研究員としての訪問滞在~」『和歌山大学国際教育研究センター年報』(和歌山大学国際教育研究センター) 6: 31-34.
- , 2010b, 「アソシアシオン——トクヴィル」日本社会学会社会学事典刊行委員会編『社会学事典』丸善, 18-19.
- , 2010c, 「トクヴィルにおける二つのアソシアシオン」『社会学史研究』(日本社会学史学会) 32: 15-28.
- , 2010d, 「『模倣の法則』におけるタルドのトクヴィル言及に関する覚書」『研究

- 年報』(和歌山大学経済学会) 14 (和歌山大学経済学部設立 60 周年記念号) : 565-576.
- , 2010e, 「[書評] 富永茂樹著『トクヴィル 現代へのまなざし』(岩波新書)」『週刊読書人』2862 (10月29日) : 4.
- , 2011a, 『「社会」の誕生——トクヴィル、デュルケム、ベルクソンの社会思想史』講談社 (講談社選書メチエ).
- , 2011b, 「自著を語る (『「社会」の誕生』解説書評)」和歌山大学書評誌『リトルネロ』24: 2-3.
- 北垣 徹, 2010a, « Du rêve interprétant au rêve interprété : pré-histoire de la théorie onirique freudienne » 『西南学院大学フランス語フランス文学論集』53: 95-104.
- , 2010b, 「産業者の社会——サン＝シモン」日本社会学会社会学事典刊行委員会編『社会学事典』丸善, 6-7.
- , 2010c, 「精神分析のなかの催眠」『フロイト全集第3巻月報18』岩波書店, 5-9.
- , 2011a, 「コンドルセからコントへ——啓蒙の転換」富永茂樹『啓蒙の運命』名古屋大学出版会, 282-316.
- , 2011b, 「見出された信仰——シャルル・ルヌーヴィエの共和思想」宇野重規・伊達聖伸・高山裕二編『社会統合と宗教的なもの——十九世紀フランスの経験』白水社, 201-239.
- 木村雅史, 2010, 「E・ゴフマンの『状況の定義』論」『社会学研究』(東北社会学研究会) 88: 73-96.
- 金瑛, 2010, 「アルヴァックスの集会的記憶論における過去の実在性」『ソシオロゴス』(ソシオロゴス編集委員会) 34: 25-42.
- , 2011, 「集会的記憶と空間——アルヴァックスとトポグラフィ」『社会システム研究』(京都大学大学院人間・環境学研究科) 14: 169-79.
- 白鳥義彦, 2010, 「フランスの高等教育制度と大学の設置形態」『大学の設置形態に関する調査研究——国立大学財務・経営センター研究報告第13号』, 91-110.
- , 2011, 「方法としての『社会』——E. デュルケム『社会学的方法の規準』」井上俊・伊藤公雄編『社会学ベーシックス別巻 社会学的思考』世界思想社, 13-22.
- 多田光宏, 2008, 「社会秩序の時間的構成によせて——社会システムの時間論序説」『現代社会学理論研究』(日本社会学理論学会) 2: 37-48.
- 編, 2009, 『東京の意味——地方出身者の「上京」に関する意識調査』(東洋大学社会学部イブニングコース 2008 年度社会調査および実習4 調査報告書) 東洋大学社会学部社会調査室.
- , 2010, "Intentionality of Communication: Theory of Self-Referential Social Systems as Sociological Phenomenology," *Schutzian Research*, 2: 183-202.
- , 2011a, 「<調査実習事例報告>東京の地方出身者を調査する——東洋大学社会学部社会学科イブニングコースでの調査実習」『社会と調査』(一般社団法人社会調査協会) 6: 77-81.
- , 2011b, 「存在から生成へ——ゲオルク・ジンメルと社会システムの存在論のための予備的考察」『ジンメル研究会会報』(ジンメル研究会) 16: 1-15.
- , 2011c, 「一種独特の実在としての社会システム——モノから主体への転回に向けて」『現代社会学理論研究』(日本社会学理論学会) 5: 89-100.
- , 2011d, 「社会の文化——世界社会の時代における文化の概念のために」『社会学評論』(日本社会学会) 62(1): 36-50.
- 伊達聖伸, 2009c, 「現代ケベックにおける『倫理・宗教文化』教育とライシテ——フランスとの比較を通して」『国際宗教研究所ニュースレター』64: 6-15.
- , 2010a, 『ライシテ、道徳、宗教学——もうひとつの近代フランス宗教史』勁草書房.
- , 2010b, 「ニコラ・サルコジの『ポジティブなライシテ』と市民宗教の論理——2007年から2008年の発言を中心に」『東北福祉大学研究紀要』34: 249-265.
- , 2010c, 「2つのライシテ——スタジ委員会報告書とブシャル＝テイラー委員

- 会報告書を読む』『宗教法』29: 117-141.
- , 2010d, 「ケベックにおける『倫理・宗教文化』教育とライシテ」『ケベック研究』2: 57-64.
- , 2010e, [訳者解説]「ライシテとは何か」マルセル・ゴーシェ著, 伊達聖伸・藤田尚志訳『民主主義と宗教』トランスビュー, 7-25.
- , 2010f, [訳者解説]「フランスのライシテの歴史を読み解くためのキーワード」ルネ・レモン著, 工藤庸子・伊達聖伸訳『政教分離を問いなおす』青土社, 191-239.
- , 2010g, 「多面体としてのライシテ——政教関係の国際比較のために」『日仏社会学会年報』20: 23-43.
- , 2011a, 「宗教を伝達する学校——ケベックのライシテと道徳・倫理・文化・スピリチュアリティ」『宗教研究』369: 243-268.
- , 2011b, 「現代ケベックの倫理・宗教文化教育——小学校の教科書の分析を通して」『ケベック研究』3: 25-42.
- , 2011c, « Les rapports entre la laïcisation et les avancées des droits de l' homme au Japon », *Croisements*, 1: 111-123.
- 田中拓道, 2010, 「市場・貧困・統治——18世紀末から1830年代のフランスにおける政治経済学」『経済学史研究』52(1): 20-34.
- , 2011a, 「脱商品化とシティズンシップ——福祉国家の一般理論のために」『思想』1043: 145-162.
- , 2011b, 「社会的なものの歴史」近藤康史・齋藤純一・宮本太郎編『社会保障と福祉国家のゆくえ——新たなる理念と制度の展望』ナカニシヤ出版, 24-43.
- , 2011c, 「福祉国家と社会運動」田村哲樹編『模索する政治——代議制民主主義と福祉国家のゆくえ』ナカニシヤ出版, 163-184.
- , 2011d, 「労働と連帯——商品化／脱商品化をめぐる」宮本太郎編『働く——雇用と社会保障の政治学（シリーズ政治の発見第2巻）』風行社, 58-86.
- , 2011e, 「フランス福祉レジームの変容」新川敏光編『福祉レジームの収斂と分岐——脱商品化と脱家族化の多様性』ミネルヴァ書房, 219-237.
- , 2011f, 「人格と連帯——十九世紀社会科学史におけるデュルケム」宇野重規・伊達聖伸・高山裕二編『社会統合と宗教的なもの——十九世紀フランスの経験』白水社, 241-266.
- , 2011g, 「社会的ヨーロッパと新しい福祉政治」田中浩編『EU を考える』未来社, 30-49.
- , 2011h, 「どうなる、福祉国家」押村高・中山俊宏編『世界政治を読み解く（世界政治叢書第10巻）』ミネルヴァ書房, 51-73.
- , 2011i, 「ヨーロッパ貧困史・福祉史研究の方法と課題」『歴史学研究』887: 1-9.
- 中倉智徳, 2011a, 『ガブリエル・タルド——贈与とアソシアシオンの体制へ』洛北出版.
- , 2011b, 「MAUSS とタルド——諸社会科学と社会的なもの」『生存学』（立命館大学生存学研究センター）3: 272.
- , 2011c, 「(喜びとしての) 社会を創りだすこと——ガブリエル・タルド『模倣の法則』」『現代思想』39(9): 186-189.
- , 2011d, 「[翻訳] 機械状アニミズム」『現代思想』39(16): 126-35. [原著: Melitopoulos, Angela & Maurizio Lazzarato "Machinic Animism"]
- 中島道男, 2010a, 「[書評] バウマン『幸福論』」『図書新聞』2958号.
- , 2010b, 「アレントの趣味判断論——共通世界と他者」『奈良女子大学 社会学論集』17: 37-53.
- , 2010c, 「「社会」の発見」『集合的沸騰——デュルケム』『リキッド・モダニティ——バウマン』日本社会学会社会学事典刊行委員会編『社会学事典』丸善, 3, 30-31, 224-225.
- 夏刈康男・松岡雅裕・杉谷武信・木下征彦, 2011, 『行為, 構造, 文化の社会学』学文社.
- 藤吉圭二, 2010a, 「政府のアカウンタビリティとアーカイブズ——20世紀前半のヴィク

- トリア州公文書管理を事例として」国文学研究資料館アーカイブズ研究系編『アーカイブズ情報の共有化に向けて』岩田書院, 41-56.
- , 2010b, 「贈与論——モース」「スーブニール論」日本社会学会社会学事典刊行委員会編『社会学事典』丸善, 140 - 141, 610 - 611.
- , 2010c, 「過疎地における大量の人口移動を伴う観光事業への取り組み——奄美大島・龍郷町を事例として」『高野山大学論叢』45, 55-70.
- , 2010d, 「ネットワーク時代のアーカイブズ——アカウントビリティ確保の拠点として」国文学研究資料館アーカイブズ研究系編『アーカイブズ情報の資源化とネットワークの研究』119-127.
- , 2010e, 「政府機関横断的な記録管理に必要なもの——オーストラリア・ヴィクトリア州の公文書管理法成立前夜」国文学研究資料館編『国文学研究資料館紀要 アーカイブズ研究篇』6, 33-47.
- , 2010f, 「情報処理から情報発信へ——高野山大学での情報教育」『密学会報』48, 1-12.
- , 2011a, “Archives, Accountability, and Democracy in the Digital Age,” Keiji Fujiyoshi ed. *Archives, Accountability, and Democracy in the Digital Age*, Koyasan: Koyasan University, 1-12.
- , 2011b, 「エピローグ」全国歴史資料保存利用機関連絡協議会近畿部会編『時を貫く記録の保存——日本の公文書館と公文書管理法』岩田書院, 93.
- , 2011c, 「体制転換とアーカイブズ——ハンガリー国立アーカイブズを事例として」『高野山大学論叢』46, 1-16.
- , 2011d, 「公文書は誰が守るのか——オーストラリア・ヴィクトリア州の公文書管理法とハリー・ナン」国文学研究資料館編『国文学研究資料館紀要 アーカイブズ研究篇』7, 17-33.
- 古市太郎, 2009a, 「地縁から親縁へ——『互酬性』の展開による社会的ネットワークの再興」『経済社会学会年報』(経済社会学会)31: 165-173.
- , 2009b, 「贈与論の再考——マルセル・モースの『全体性』の思考とジョルジュ・バタイユの『普遍経済』への影響」『社会学論集』(早稲田大学大学院社会科学研究所)14: 32-45.
- , 2009c, 「地域コミュニティとボランティア——開かれた地域性とまちづくり」田村正勝編著『ボランティア論——共生の理念と実践』ミネルヴァ書房, 181-210.
- , 2010, 「地縁組織とボランティアをむすぶネットワークの創出——東京都中央区月島地区・西仲共栄会の活動を事例に」『都市社会研究』(せたがや自治政策研究所)2: 82-98.
- 松永寛明, 2010, 「1970年代以降の犯罪・年齢・職業」『社会学部論集』(佛教大学社会学部)51: 37-53.
- , 2011a, 「明治初期の刑罰と年齢」『青少年問題』(青少年問題研究会)642: 24-29.
- , 2011b, 「日本の後期近代と少年非行」『市大社会学』(大阪市立大学社会学研究会)12: 1-14.
- 三上剛史, 2010a, 『社会の思考——リスクと監視と個人化』学文社.
- , 2010b, 「<個人と社会>再考——「と」の理論と現在」『GCOE 国際共同研究4——公共圏と「多元的近代」の社会理論』(京都大学), 103-118.
- , 2010c, 「モノドロロジーと社会学——意識システムとモノ」『国際文化学研究』(神戸大学大学院国際文化学研究科紀要)34: 23-45.
- , 2010d, 「公共性と市民社会——アーレント」日本社会学会社会学事典刊行委員会編『社会学事典』丸善, 124-125.
- , 2011a, 「構造論の社会学史」早川洋行編『よくわかる社会学史』ネルヴァ書房, 30-43.
- , 2011b, 「現代史の中の社会科学——H.S.ヒューズ『意識と社会』」井上俊・伊藤公雄編『社会学的思考』世界思想社, 105-114.

- , 2011c, 「<個人化>する社会の個人」『社会学史研究』(日本社会学史学会) 33: 41-58.
- , 2011d, 「個人化論の位相——「第二の近代」というフレーム」ウルリッヒ・ベック・鈴木宗徳・伊藤美登里編『リスク化する日本社会——ウルリッヒ・ベックとの対話』岩波書店, 37-51.
- 溝口大助, 2009, 「[書評] 松本尚之著『アフリカの王を生み出す人々——ポスト植民地主義時代の「首長位の復活」と非集権制社会』」『文化人類学』74(2): 350-353.
- , 2010a, 「想像的なものと暴力——現代フランス語圏西アフリカにおける呪術的想像力」『日仏社会学年報』19: 41-61.
- , 2010b, 「起点としてのモース④——モースの「新しい道徳」についての覚書」『月刊百科』569: 16-23.
- , 2011a, 「マリ共和国南部カディオロ県セヌフォ社会における「婚姻」儀礼」『人文学報』483: 1-33.
- , 2011b, 「一八九九年のモース——起点としての「供犠論」と「社会主義的行動」」マルセル・モース研究会『マルセル・モースの世界』平凡社新書.
- 山田陽子, 2010, 「時間管理と自己——『自分』を設計する」『現代社会学』11: 3-14.
- , 2011a, 「『感情資本主義』の進展——ビジネスパーソンのメンタルヘルスケアにみる感情管理」『社会分析』38: 99-116.
- , 2011b, 「『感情資本主義』社会の分析に向けて——メンタル不全＝リスク＝コスト」『現代思想』39(2): 214-227.
- , 2011c, 「メンタルヘルスケアの社会学」藤村正之編『いのちとライフコースの社会学』弘文堂, 183-193.

§ 編集事務局より §

2年ぶりに刊行しますニューズレター第11・12合併号をお届けいたします。諸般の事情でこのニューズレターは1回お休みとなりましたが、この間も研究例会は例年通り開催され、2010年・2011年ともにそれぞれ2回の例会を開催することができました。2010年4月には荻野昌弘会員のお世話により関西学院大学東京丸の内キャンパスにて第20回の研究会、10月には岡崎宏樹会員のお世話で京都学園大学京町屋キャンパスにて第21回の研究例会を開催することができました。4月の東京では佐藤典子会員のご尽力により懇親会は屋形船で隅田川クルーズを楽しむことができました。また、10月の例会は京都の町屋を利用した風情あるお座敷での開催となりました。

2011年は3月11日の東日本大震災の傷跡も生々しい中でのスタートでした。4月には菊谷和宏会員・小関彩子会員のお世話により和歌山大学まちかどサテライトにて第22回研究例会、10月には北垣徹会員のお世話により西南学院大学にて第23回研究例会を開催いたしました。こうして振り返ると、これら4回の例会のうち3回が交通の利便性の高いサテライト・キャンパスでの開催です。交通の便や懇親会の趣向にお心配りをいただきました開催校関係の皆様に変更して御礼申し上げます。

さて、次回の第24回研究例会は、2012年4月14日(土)13:00~17:30の予定で、伊達聖伸会員のご尽力により上智大学四谷キャンパスにて開催いたします。研究例会の共通テーマは「集合表象をめぐって——記憶とカテゴリー——」で、京都大学大学院博士課程の金 瑛会員(「アルヴァックスの集合的記憶論」)、そして尚絅学院大学の太田健児会員(「『宗教生活の原初形態』における「カテゴリー論」再考」)による報告を予定しております。会員の皆様のご参加をお待ちしております。